

---

# 翼持ちと翼持ちと翼持ちと蟲飼い

田中カナタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翼持ちと翼持ちと翼持ちと蟲飼い

### 【Nコード】

N7255C

### 【作者名】

田中カナタ

### 【あらすじ】

世界の可能性を審議し、そして在り方を裁く『世界平衡機構蓋然査問官』  
そんな大層な仕事をしているとは傍から見ても思われない男、ミハル「D」アルク。そんな彼と彼の憑き妖精風人工生命体「プット」のマジは、とある業務のために南国の村ハグを訪れた。

## 序

どうして、「懐かしい」なんて思ったんだろう。

そんな疑問が浮かんでは消える。浮かんでは消える。浮かんでは消える。

気持ちが悪い。

心持ちが定まらない。

イメージ的には 真っ白な曲面を左右に転がり続けるガラス球だ。

そのガラス球を見ているのが私なのか、そのガラス球自体が私なのか。そこが判らない。自在が無い。だから、不安定。

でも、私は確かに「懐かしい」夢をみたのだ。

きつと思いつけるはず。もう一度、あの夢を再現してみよう。

目の奥を圧迫するように力む。

白いイメージが青くフェードアウトしていく。そして、視界に模した情報が再構成され始める。

うん。完璧だ。間違いは無い。

そこは、私の生まれ故郷である静かな村で。

休みなく沈んでは昇ることを繰り返す太陽と。

慣れていけばそんなことはないけど、そうでない人にはちょっと鼻に沁みる、浜から流れてくる強い潮風と。

海の産物と一緒に天日干しされる、真っ白な洗濯物たちと。

そして、大好きだった、村の人たちと

手を伸ばせば届きそうな距離感。 見ているだけなのは嫌だ。 私は

ガラス球になりたいのだ。その世界で生きていきたいのに。

暗転。

一瞬にして、これらのイメージは消え去った。

在りし日の私の村。過ぎ去った時間の私の記憶。その眩い光景の素晴らしさに比例するように、私の悲しみは肥大していく。

どろして。

どろして、「悲しい」なんて思ったんだろう。

その疑問は消えたりはしない。

じくじくと蝕むように。 蝨食むように。

私を犯していく。

## 海：海の朝

ここは、ヒトが入植してまだ100年しか経たない未開の大陸。舞台はその大陸南端に位置する海の町ハグ。

世界を握る一人である老人の娘を連れて、お国仕えの公務員であるミハルはこの村へふらふらとやって来た。と言っても、流浪の旅の末に辿り着いた訳ではない。目的はある。ただ、道中で彼の精根（生々しい）は尽きてしまっていたのだ。

金切り声で鳴く小虫を踏み、そして躪り潰す。

くかー、と色々と豪快に広げてベッドに眠るエリス嬢を起こさぬよう、ミハルは抜き足差し足、静かに部屋を出た。

宿から出て、海上の地面に立つ。木の橋が軋んで音を上げた。

黄土色のマントが潮風にはためく。

「ふう。いやー、今日も太陽が眩しいなあ」

「そうですねー」

ミハルの頭上から降ってきたのは、明るい鈴の音のような声。

「……ちっ」

「あ、舌打ちした」

バサバサと羽をはためかせ、おとぎ話に登場する妖精の様な風貌の小さなマギは、ゆっくりとミハルの左肩に降り立った。

マギは、「プット」という名称の人工生命体である。ミハルの助手と位置づけても差し支えない。

肩には掛からない程度の、ウェーブが掛かったブロンドの髪。光に当たると淡く輝く瑠璃色の瞳。マギの色彩豊かで美しく整った顔立ちに、ミハルは飽きを感じたことはない。また、幼児の頭身が少し高くなったようなその小さな身体は、彼女がヒトならざるものであることを何気なく示している。まあ、背中から生える一对の翼が、

その事実を決定的にしているのだが。

マギの翼が首筋を撫でる。

彼女は優しい愛撫で、僕のやや下方の空間的問題を顕在化させ以下略。

わざとらしく咳を吐き、間を持たせる。

ペド反対！ ペド反対！

倒錯してはいけない。朝からそれはいけない。だったらいつなら許されるのだと天に伺いたい。天啓よ、垂らせたまえ。

「マギ。何処から出て来た」

めんどいので仕切り直した。肩に腰掛けたマギに訊ねる。

「何処つて、あっちですよ」

マギが背を反らして縦一時の方向を指差す。その先には、宿の窓があった。一夜を過ごした部屋の窓が。

なるほど。飛び降りてきた訳か。飛べないくせに。

「多少の揚力ぐらいは発生させますよ」

「マギたん背筋痛いもんな痛え」

マギは地引網でも引くかのように、ミハルの揉み上げを引っ張った。彼女の抗議時の行動として近頃定着しつつある。

「痛い痛い」

「他の人に聞かれたらお嫁に往けなくなっちゃうじゃないですか。もう」

信じられない話だが、ここ近年にプット同士の婚約が認められらしい。人間が作り出した個体が、とうとう自由意志を持つことを認められてしまった。人間によって。

ヒトは神にでもなってしまったのだろうか。

「残念でした。向こう千年は俺にかしづく義務があるのだよ、マギたんには」

「じゃあ責任とって下さいね」

「はは。考えておくよ」

都合数百回目の台詞を呟いて、ミハルは額に手をかざした。

今日は天気が良い。海鳥の鳴声が、岸の方から断続的に聞こえてきている。

潮の香りにも誘われてみようか。ミハルはそう思った。

## 潮風

朝の静かな海岸線沿いにて。

ミハルは、背を前にして歩きながら、潮が押し寄せては自分の足跡を消していくのを見ていた。

九つ。

十歩目の足を踏み込んだ辺りで、それら九つの足跡は、元から無かったかのように消え失せていく。

「何してるんですか？」

マギが耳元で囁いた。囁いたといつても、彼女にとってはそれが普通の声量である。基体が小さいのだから、致し方ない。

「いや、特に意図はないよ」

嘘だけど。

「嘘見え見えです」

嘘ばれてた。残念。

「でもさあ、マギたん……」

この世には、やっても良い事と、やらなくても良い事が、しつかりと二分化されているのではないでしょうか。

そう言おうとした、その時に。

マギは慈しむようにミハルの耳朶を撫でた。そして、その小さな口を、申し訳程度に開く。

『天司庁第八層／世界平衡機構部／  
／しつkou彙 - n n . o i 3』  
／蓋然査問委インカイ

彼女の口から発せられたのは、言葉ではなく、シグナル音。それに呼応して、本来あってはならないものが、ミハルの脳髓を巡る血流中に混じる。

おとが

ある程度の強制力を持った複数のワードが、同時に耳内で反響する。

せつなく、

延髄を締め上げられ、呼吸が止まる。

だんぞくてきに

そんな錯誤を覚えた。

うずまきえぐる

「ひ、きょうじじゃないか、それは」

ほとばしるものを無理矢理に塞き止められたときにも似た恍惚感と焦燥感が、ミハルを急き立てる。

苦しい。痛い。

「ミハル様」

「だって、予定座標じゃ、もうちよつと先だ、し」

「

再び作動体に働きかけるマギ。容赦なしですか。

「は、あつ」

認識不可の信号音は、つまりは罪人の枷なのであって、悪い子にはお仕置きが必要と言う理由の下、世界を手に入れてもまだ満たされないまま永い年月の間に頭が固まりきった強欲爺さんが監視役のブットに組み込んだ人工作動体が発する音であり、適応体 つまりミハルの内耳に移植させた人工作動体が認識するパスコードとなっている。

その音と記号に含まれる意味には可逆の恣意性が働いており、それに該当されるものが任意に発せられたならば、直ちに作動体が機能する。

と、しばらく喘いでいる間に、良い感じで説明終了。

世界が一回転して、ミハルは膝をついた。

「ぶっ」

あ。肩からマギたん落ちた。

「は、はは」

意味もなく笑った。

こんな所で何をしているんだ、自分は。

意味が解からなくて、笑った。

「ミハル様あ」

顔に砂粒を塗したマギは、泣きそうになりながら懇願してくる。

潮が押し寄せて。

海鳥の暢気な鳴声が耳に障り、潮の臭いで今更に胸のむかつきを覚えた。

／＊／

質素なベッドの上で、黒いシートに覆われた丸い物体がもぞもぞと蠢いている。

もぞもぞ。

黒いシートが広がっていく。遠心的に広がっていく。

しばらくして、ベッドが真っ黒になった。

如何とも理解し難い光景がそこでは展開されている。しかし、それを目撃している者はいない。

が。

「腹減った」

そんな声を号令にして、一斉に「黒」が「白いシート」の中身に潜り込んでいった。

## 波打ち際

「ミハル様あ」

垂れた眉。涙を溜める大きな目。砂で汚れた頬。紅い唇。やわらかそうな肉感溢れるその小さな以下略。

「イカ」

「はい？」

マギは泣きそうな表情のまま眉を寄せた。

「いや、なんでもないです」

「いかんいかん、と頭を搔くミハル。」

脳の思考野と言語野とを結ぶこの直結回路はどうにかしてもらいたい。そうでないといつ桃源郷な中身が漏れ出すか、当の本人にも知れたものではない。そうなった場合、牢名主に転職しなければならなくなる。強いぞ凄いぞ牢名主。

「……いいかも牢名主。」

「よくないですよっ」

「聞カレテータツ」

「聞かれてたも何も、あなたの考えてることは駄々漏れです。それに、桃源郷に『桃色パラダイス』なんて意味不明なルビふっている場合でもないんですっ」

「ぐは。端っから思考が零れていたとは……」

「まったく……信じられないです……」

「と言って、頬を膨らませるマギ。」

「ルビに、よもや、漢字を用いるなんて……」

「そっちかよ」

オチたところで、ミハルはマギにチョップを喰らわせた。彼女の小さな口から「ぷびゅ」という不可思議な音が漏れる。

「……………」

手刀を下ろした状態のまま、ミハルはマギの頭を撫でた。

「……………ミハル様あ」

ずつと膝をついたままだったので、体勢を変える。ミハルはその場に腰を下ろした。そして、衣服に付着した砂を払いながら、咳く。「いや、ね。判っているんだよ、マギたん」

「はい」

「ただ、”解らない”」

「……………あなたは」

「俺は天司庁の蓋然査問官。困ったことに、エリートの中のエリート。その中でも更なるエリートであるわけだ」

ミハルは、片方の口端を吊り上げた。アイロニカルな笑み。

「畜生、あのクソジジイ……………なんだってこんなことを……………」  
卑しい。

ちくしょう。悔やむものか。それはきつと敗北だ。振り返るな。

背後に積み上げたものを省みるな。最後までとっておけ。振り返れば

きつと、崩れる。

そんな、さやかな暗闇を必死に押さえ込む。

「あなたは負けません」

「何に？」

「世界に。それが世界の在り方でしょう。それが世界の意志でしょう」

そう言いながら、マギはミハルに両手を差し伸べる。指をいっばいに開いて。

「天秤を調律することは難しいですか？」

「ああ。難しいね」

「だけど、出来ないことはない。出来ないはずがないんです。世界の無限の密度は、それこそ無限です。解りますか？」

「はは。なかなか抽象的なことを言うね。それでも蓋然査問官のプツトかい？」

「解りますか？」

マギの表情は変わらない。彼女は、怒っている。

いや、違う。つまり、これがシステムであって、彼女が人工生命体であるところの由縁。いくらプットが自由意志を得たといっても、所詮、そんなものは人間の都合に過ぎない。形而上の便宜、そして不可視の手綱だろう。

彼女は、怒っていない。なにものにも揺さぶられてはいない。悲しいことに。

「わかるよ。マギさんの言いたいことも、僕の成すべきことも」

「本当に？」

「じじいに誓って」

「ミハル様に誓ってくれないと、わ、わたたー」

彼女の翼を握って、拾い上げる。

「ミ、ミハル様、一体何をするんですかあつ」

手足をもがかせて暴れるマギ。ミハルは、そのまま彼女を自分の肩に乗せた。

きょとんとするマギだったが、すぐさまに抗議の音を挙げた。

「レディになんてことするんですかつ。責任、せきにんーっ」

はいはい。適当に彼女をあしらいながら

ミハルは、波打ち際の続く先を見やる。

世界は平衡を作用する。

奢り高くもこの身が演じるは、その崇高なる代行者だ。

「彼我確認」

海岸線の向こうに、少女が、独りで、倒れている。

それを視覚した脳が、在り得ない事象を排除しようと足掻き始める。

滲み出てくる頭痛とともに、ノイズが奔るように霞んでいく少女の姿。

ミハルは首を振って、そのビジョンを否定した。

自己否定に繋がる行為は、いつかは自壊へと結線させる。存在しない蓋然性を否定しないことは、つまり

(所詮は俺も、システムか)

いつかは、存在意義の自己否定へと辿り着くということ。

世界解離性症候群。

そんな病名すら存在するこの世界に対して、ミハルは知る限りの呪詛を吐き棄てた。

## 砂浜衝撃

／＊／

追われて追われて追われて

ああ、私は、空に辿り着けたのでしょうか。

／＊／

腰まで届く程に長い、真っ直ぐな黒髪。浜の砂に汚れていても、その光沢は少しも失われていないようでとても艶やかである。背中の大きく開いた真っ白なワンピースが、彼女のスレンダーな体型と見事に同調しており、未成熟な少女に相応しい瑞々しさを醸し出していた。

そんな彼女にしばし見とれつつも、ミハルは中腰になって、ペシペシと、砂浜に眠れる少女の頬を軽く叩いてみる。

「おーい」

しかし、反応がない。ミハルは「ふむ」と言ってから、背後に背を向けて立っている小さなマギを見やった。

「対象確認 情報クラスター解析 改変確認

」

呪文めいた言語群を呟いていくマギ。

こつちからは見えないが、おそらくマギは、あの少しトリップした瞳で虚空で凝視しているのだろう。プットの特性の一つである作動体、“電脳”。彼女は目下その使用中である。

プットの最新鋭世代である彼女は、先達に比べて様々な面でグレ

ードアップしている。例えば、電腦においては、プット・ネットワークにはびこる情報の取得だけではなく、自身が記憶する情報の公開することまで可能となっているのだ。四六時中構わず東西を奔放しようが、私生活の尊重をいくら訴えようが、ミハルはマジを通して常に誰かの監視下にあるのである。

「自由ってなんだろう」

我知らず、ぼやいてしまう。まあ、戒めと捉えられてしまったら、それまでなのだが。

嘆息して、ミハルは視線をうつ伏せに眠れる少女に戻した。

「……………」

寝ている。少女は。すやすやと。

(いやー、しかし)

見事な“翼”が、その薄汚れた純白が、目に痛い。

最初に彼女が生やす翼をみたとき、ミハルは笑うしかなかった。こみ上げてくるものを抑え切れなかった。

“これ”が完成したとき、創造者本人も、きつとこんな心持ちだったのだろう。

実に、業が深い。深いにも程がある。と。

「ん」

その時、僅かだが、少女の翼の先端が動いた。

「ふむ。動くんだな、これ。結構なお手前だね」

そう言いながら、ミハルは少女の翼をつまみ上げた。

「ご拝見いたします」

「うん」

少女が悶える。うほ。いい悶え方。

いや、違うそうではない。自分も悶えてどうする。だが、しかし、この湧き上がる情動は青年の健やかな成長と夢と希望のその先に顕

在する未到達領域が光眩く

「どろっぶきいっくっつ!!」

「さくらばっつ!?!」

高等部に、いや、後頭部に衝撃が炸裂する。どうやら、マギたんの“どろっぶきっく”とやらがこのミハル・アルクのやや右寄りの後頭部にめいちゅうしたようであります。

おかげでいみふめいなりあくしよんをしまいました。

「こらー。無抵抗なご婦人に何するですかあっ」

「いたたた……………いや、ご婦人て。この娘、明らかに未成年じゃ

「尚更に悪いです! このペドフィリア!!」

また叫んで、肩で息するマギ。

「はあはあ……………まったくう。私というものを傍においていながら…

……………」

口を尖らせて呟く、ほんのりツンデレ風味なマギ。

「いや、マギたんじゃ小さすぎる」

「なにさまっつ!?!?」

真っ赤になって、両腕で胸を隠すマギ。

……………うむ、感動した。見事なキャラクターライズっぷりである。天晴れ。というか、小さいと言ったのは、そこではなくて……………いや、まあ、良いか。皆まで言っまい。

この場を仕切りなおすため、ミハルはとりあえず、現状の経緯を説明する。

「違うんだ、マギたん」

「何が違うって釈明するんですか?」

「そうだよ、これは釈明さ。さっきのは誤解さ。なんだ、ちゃんと解ってくれてるじゃないか」

そういうと、一拍おいてから、マギは身体をもじもじさせながら、こちらを上目使いで見してきた。そして、

「だって……………この私が解ってあげなかったら、誰もミハルさまなんか理解してくれないですよ」

さらりとクリティカルなことを言い放つ。

誰も

なんか

理解してくれない

ですよ。

いや、最後は違うだろ。

「…………… マギたんキツイ」

ノーマルな僕は涙する。僕は、罵られて喜ぶ人の気が知れません。

ガイですか？ ちなみに、 に入るのは“ナイス”です。“

メイド・”でも可。あしからず。

「あわ、わわわ、ミハル様、どうして泣くんですか？」

「ははは、潮風が、目に、沁みてね。なんてこたあないさ」

「そうですか。では、先ほどのご説明を、どうぞ」

クール&ビューティー・マギ。ここに爆誕。

「…………… いいんだけどさ。いや、なに。ただ俺は、は、学術的好

奇心に駆られたただだよ」

「と、言いますと？」

「この子の翼」

「翼なら私にもありますよー」

と言つて、マギは腰を左右に振りながら翼をアピールする。しか

し、ミハルは首を横に振る。

「そうじゃない。マギはプット。君は、“そうなるべくして生まれ

てきた”存在だ。だが、この子は、ヒト。これは間違いない。もし

科目の差異があつたとしても、属は同じだろう。形態からみて明らかだ

」

ミハルは、目でマギの同意を求める。彼女は真面目に頷いた。

説明を続ける。

「だけど、彼女には両腕がある」

「私にもありますけど」

「そうだね。マギにも腕がある。それは当然なんだ。プットは六肢

それぞれ二対の腕と脚、そして翼が発生するようにプログラムされている。だが、この子はヒトだ」

そこで、ミハルは、未だに眠り続ける少女に視線を移した。

「この第三大陸が発見されて、何年になる？」

そう訊くと、すぐさまにマギは「ちょうど百年です」と答えた。

「だな。俺もそう知っている。そして、俺たちがここに移住するようになって、まあ、九十年くらい経つ。じゃあ、マギ。この大陸に僕らの知識にない生物種は、どれくらいいると思う？ 大体の概算でいいよ」

「はい プロキシ許可 接続」

マギの双眸が虚ろに光る。尋ねておいてなんだが、どうも、彼女のこの電腦使用中の表情は好きになれない。

「 できました。少なくとも現在認知されている二万二千種。

当大陸の気候や報告されている生態ヒエラルキーを踏まえれば最大で三千万種です。」

「なるほど。では、再三訊くけど、未報告の生物の中に、僕らと意思疎通が図れるものはいるかい？」

「……………99.9%、いません」

「じゃあ、0.01%以下の確立の事象が成立したとしよう。僕らがまだコンタクトを果たしていない、高度知識生命体が、この大陸に存在する」

ミハルが少女の翼に触れる。マギも彼女を見た。ようやく、意識的に見た。痛々しいものを見る目で。

(解っているくせに)

この場ではおいておくべきことに対して、ミハルは心の中で毒を吐いた。

「彼女が“それ”だと？」

「言わないさ。いや、言えない。何故なら、この重力下の環境で、たとえ悠久の時間があつたとしても、背部から翼が生える組織の進化なんて考えられないから」

そう言つと、マギも頷いて、ミハルの言葉に続く。

「では、やはり彼女は、委員会の議決通りで

「ああ

ヒトである少女。発生の予定運命にない二対の翼。恐らくその神経や筋肉組織も中枢につながっているのだらう。

これらの条件成就によつて導き出される結論は。

ミハルは口端の片側を吊り上げ、その答えを言い放つ。

「これは“キメラ”だ」

## 海上の錆びた褐色

いくら叩いても翼の少女は目覚める気配を見せないで、人目につく前に、取り敢えずこの場から移動しよう、という話になった。

ミハルは身に着けていた黄土色のマントを脱ぎ、少女に巻き付けた。なんとか翼が見えない状態で収まるよう努める。

「ま、これでバレる心配もない。まだ誰にも発見されていないみたいだし、さっさと立ち去りますか、っと」

踏ん張って、少女を持ち上げる。秘技、ザ・お姫様抱っこ。

「なんだかミハル様、人さらいにしか見えません」

ミハルの側頭部にしがみつくマギがぼそりと言う。聞いて、ミハルはニヤリと笑った。

「だって、人さらいですから………もしかして、マギたん、妬いてる？」

「ち、違いますう」

マギを言葉で弄りながら、思う。

何か変なものでもインストールしたのだろうか。彼女のキャラが変な方向に向いている気がする。

いや、しかし、これはこれで良いのですが。

少女を抱えて宿まで戻る途中、砂浜へ向かった時とは打って変わり、朝から元気な何人かの村民に声を掛けられる。主に、たくましそうなマダムから。

「あら、両手に花」

「あたしもお姫様抱っこしてもらいたいわガハハハハ」

「まあまあ、朝からお盛んねえ」

ちよっとは怪しく思えよ。

「ヒトのおばさんって、揃って下世話ですよねー」

「お願いだから、マダムの前でそういう事言わないでね、マギたん」

そんな会話をしながら、ようやく宿の前まで辿り着く。

「ふう」

「あらまあ、またアンタ、そんな女の子連れ込んで。絶倫ねえ」

もう幾度目になるだろうか、背中越しに声を掛けられる。ああ、またか……いや、聞き覚えのあるこの声は。

振り返るのは、少し躊躇われた。

「まさか、ウチの村の娘を引っ掛けてきたんじゃないだろうね」

言いながら、ズンズンと接近してくる、この宿の重量級女主人さん。確か名前は ええと、忘れた。どうやら洗濯物を干している途中だったようで、彼女の片腕には白いシーツが掛けられている。

傍まで来た彼女は、遠慮なしにこちらの腕の中の少女を覗き込んだ。

「……おや、違うようだね」

女主人は意外そうに言う。村の娘であると思った根拠は、恐らくこの辺境の小さな村を訪れる外の人間が滅多にいない、といったところにあるのだろう。

ミハルは、瞬きを一回した後、「後で落ち合う予定だった仲間ですよ」とうそぶいた。

疑う理由も信じる根拠もないため、女主人はいぶかしげな表情しかできない。

その後、二言三言、彼女と交わして、エキゾチックな内装の宿の中に入った。遅れて、朝食は出ないので自分で調達しろ、という野太い声が外から聞こえてくる。

「あらま。朝飯でないだつてさ、マギ」

「えー。お腹空きましたよう」と。

赤い絨毯敷きのフロアを渡り、白い軽石の階段を上り始めようを

した、その時。

「おい、エリス」

抑揚に乏しい若い女性の声が、頭上からミハルに降りかかる。

一瞬、ミハルの足が止まったが、すぐさまに歩みを再開させた。

「違う。僕はミハルという名前だっすいぶん前に教えただろう。

どうして今更そう呼びかける、エリス」

顔を上げずにミハルは階段を上っていく。ヒトを抱えながらは、

なかなか難しい。ふらふらして体幹が安定しないので、マギも必死に顔にしがみついている。

「エリス、すまないけど、部屋のドアを開けてくれないかい？」

そう言うも、視界に入ってきたエリスの両足は、階段と踊り場の境界から動こうとしない。

「エリスはエリスだ。エリスもエリスだ」

「エリス。そこをどいてくれないと、コレを運べない」

「そーですよー」

しがみつきながら、マギもミハルの援護射撃を放つ。が、

「うるさい羽虫」

「はむ、はむし!?!」

エリスにばっさり切られた羽虫　もとい、マギ砲、沈黙。

「なあ、エリス」

耳元で呻いているマギはさておき、ここでミハルはようやく顔を上げた。

面倒なことになるのは、判っている。判っているので、迅速かつ穩便に事を運ぼうとしていたのだが。

改めて、彼女を見た。

言動の在り方と照らし合わせたような容姿の少女が、そこにいる。ぼさぼさに伸びた長い白髪、ぶつきらぼうな半開きの赤い瞳、そして、褐色の瘦躯。控えめな身体の線が、この宿の雰囲気自然に溶

け込んでいて、まるで一枚の絵のようだった。その絵の名は

『裸一貫・野生白髪少女　く飛び出したジャングル』。

「　　っておいこの露出狂」

ふふん、と何故か満足そうなすっぱんぽん少女。

「ようやく見たかエリス」

「ば、バカ娘、股を開くなっつ」

「……………よし」

そう言うと、エリスは道を空けた。一体、なにがよろしいのでしょうか。

「エリスは腹がへったのだ。飯を食いにいくぞ。ここは飯がでてこんのだ。まったく。自分たちはうまそうなものを食べているのに…

……………どうした、早く通らんか」

「『どうした』じゃない。服を着ろ、服を」

目を逸らして、小さな胸を張る彼女に忠告する。

「ん？」

「『ん？』でもない。あのね、いい加減、裸で外をうろろろする癖をやめなさい。変なオッサンにさらわれるぞ」

「変なことを言う。エリスを守るのが、ミハルの仕事ではないか」  
確かに、それもミハルの務めるべき使命の一つである。というか、その為には、命を賭すことも辞さない覚悟を持つべきである。本来なら。

「あーもういい。ちょっと待っとけ」

言って、階段の傍に借りている部屋へと駆け込む。ドアノブは、翼の少女を抱えながら、無理やり回した。部屋の中は、質素なベッドが二台と簡単な作りのテーブルセットが一式置かれているだけの、とてもシンプルな内装をしている。

手前のベッドの上に少女を寝かす。浜の砂でベッドが汚れるだが、もう面倒なので考えない。彼女を包んでいたマントは、シーツ代わりに彼女に掛けてやった。次に、エリスの服を探そうと、お世辞にも広いとは言えない部屋を見渡す。時折目に入る、窓の向こう

のどかな青い風景に自分とのテンションの差を嘲笑われているように、無性に悲しくなった。

目的の品が見つからないので、左肩の上のマギに訊く。

「エリスの服、何処だ？」

「……知りませんよお。どうせまたベッドの下とかじゃないですか」

と、投げやりに言うマギ。羽虫が心外に辛辣な表現だったようです。口を尖らせて不機嫌面の彼女は、少々動きの妨げになるので、肩から退けて、ベッドの上にちよこんと乗っかっておいてもらう。

ミハルは屈んで、ベッドの下を覗き込んだ。そして、そこに突っ込んだ腕を彷徨わせていると。

「お。あつたあつた」

そう言つてミハルが取り出すは薄汚れたボロ布 ではなく、これぞ紛う事なき、エリスの服。これを服と呼ぶのは些か被服職人に申し訳ないというか、失礼な気もする。しかし、これ以上に彼女のアイデンティティを主張できる衣服は存在しないであろう。頭から被ると人一人分覆える布に、頭と手を出せるように三つの穴を開けただけのもの。それがエリス・クオリティ。

……外的価値は、まったくもつてのゼロであるが。

なんにしる、これをエリスに着てもらわなくては。彼女が困らなくても、周囲に多大な迷惑が掛かってしまう。

「エリスー。こっち来ーい」

呼んだ。

「エリスー」

呼んだ。

「……エリスさあん」

丁重に、お呼び申し上げる。

だのに。彼女は、やって来るどころか、返事すら、しません。

「あれー、もしかしてー」

「さっきまるで何かが階段から飛び降りてそのまま着地するような

音がしましたよー」

「ガッデム!!!?」

まさかのマギの告白に、ボロ布を放り投げて、頭を抱えつつ叫ぶミハル。

「どうして教えてくれないんデスカっ!?」

鋭角的な動きでミハルはベッドの上のマギに詰め寄る。

彼女は悪びれずに答えた。

「羽虫に口なしでーす」

「今喋ってるしっつ!!!」

「でも羽虫ですしい。ぶんぶーん」

ふざけた顔で羽根をパタパタさせるマギに一抹の怒りを覚えたミハルであったが、取り敢えず、今はそんな場合ではない。握りこぶしを片方の手で押さえながら、考える。

こんな辺鄙な村でエリスが猥褻罪で摘発されたとなっては、彼女を自分に預けた彼女の祖父さんに顔向けが出来ない。というか、喰い殺されます。

命の、危険が、危ない。

そつだ。これは、一大事だっ（主に自分の）。

「マギたん、“それ”頼んだっつ」

「ぶんぶーん」

意味不明な羽虫語(?)で返事をするマギを尻目に、ミハルは部屋から飛び出した。

## 閑話・世界乖離

「この辺りで、裸の少女を見かけませんでしたか？」

「いやいやいや。そんな吐いたら即被不審者認定な台詞で迂闊に訊きまわる訳にもいかず。」

「僕の連れなんですけど、宿から色黒の娘がでてきませんでしたか？」

「無難な言葉を選んで、まずは宿の外で洗濯物を干していた女主人に尋ねた。」

「いんや、見てないね」

「ふむ。あ、おかみさん、ここでずっと洗濯物干してたんですか？ 張り巡らされた紐に大量にぶら下がっている布や衣類を見ると、恐らくそうであろうという推測の下に訊く。」

「そうだよ。アンタが二号さんをここに連れてきたときからね  
あ、ちよつとアンタ」

「ここは浅瀬の村、ハグ。村内を移動するには、人の手で作られた木製の地面を渡って行かなければならない。よって、迂回路があちこちに存在する訳はなく 宿から出て、選べる道は二択。女主人がいる方向の村の外へと繋がるルートか、もしくは、その反対側の村中心部へと繋がるルートか まあ、その方向へ行っても、村の外へと出られる道は設置されているだろうが。なんにしろ、ここで二者択一は。」

瞬間の間に考えて、ミハルは駆け出した。

「ありがとう、おかみさん。昼飯、楽しみにしてるよー」

「こちらから話しかける隙も与えずに村の広場へと走り去って行くミハルに、開いた口はそのまま呆然とする女主人。彼を留めようと上げかけた腕だけが、中途半端にやりどころなく残される。」

「訊きたい事があつたのにねえ」  
そう呟きながら、洗濯物の処理を続ける女主人だった。

／＊／

宿の人間と何事かを会話し、走り去つて行くミハル。その一連のやり取りを、部屋の窓から覗いている小さな影が一つあつた。

(……確認)

羽根を少し拡げ、マギは窓の縁から飛び降りた。彼女の軽い荷重が、木目が這う床を小さく鳴らす。

(さて、と) ベッドに横たわる少女を見上げる。

現在、マギには二つの選択肢が用意されている。

委員会に、現状を報告するか、しないか。

その二択を選別するために、マギはミハルを“外へ追いやつた”のだ。

苦笑する。なかなかどうして、あの蟲飼いの女は良い仕事をするではないか。無論、全てがこちら側の都合であるが、折角の機会を無碍にする道理はなく、これを有効に活用させて貰つた。

……………あれ？

嫌だ。そうは在りたくない。

(ミハルさ、ま) 不意に、意識が途切れる。

re:BOOT...over.  
”the ALL be the END” this cod  
e's consented...not f  
ound.  
a standby...re:BOOT

「は、かつ、あああ、っつ」

床に手をつき、喘ぐ。唾液と胃液が入り混じった液体が、どうしようもなく唾内から零れ落ちる。動悸が小さな体には激しすぎた。システム・テキストの一部分を改竄した。咄嗟の判断であったが、自己クラックは、どうやら上手くいったようである。

“あれ”は仮想メモリ内に閉じ込めた。

「はあ、はっあ、はあ……………」

呼吸を整えながら、マギは目の前で掌を握り、そして、再び開いた。それを数回繰り返す。

「あは、あは……………まだ、動きます……………」

安心して、仰向けに寝転ぶマギ。

青い空が瞳に映る。

「……………はあ」

この空の下で、彼女は、彼と一緒に歩いてきたのだ。

空は在るがままに美しい。

誰にも汚せはしない。

視える世界は私だけのもの。

誰にも理解はさせない。

だから、守るのである。“あれ”には屈しない。

(私が　ミハル様を解ってあげなきゃ)

そうでなければ、一体誰が、彼を理解してくれるというのか。

彼を導くのが、この身の天命。導く先には、世界の中心がある。

そして、最後には、彼が決断するのだ。

たとえ、世界に現象されなくなったとしても。

この世界は、彼が選ぶ　世界の意志とともに。

## 閑話・旋回海里

第三大陸のアンゲル人大使領内。ここは、その中の内海に隣する小さな自治体、浅瀬の村ハグ。巨大な港町が、遙か遠方にある入り江の口を陣取っているため、特に海路面での役得のない村と化している。

また、周囲を道が整備されていない山に囲まれているので、観光地としても成り立っていない。たまに人が迷い込んでくることがあるが、そんな人間は限って金を持っていない。

主産業は漁業。しかし、港町の工業汚染によって年々漁獲量は減っている。

崖っぷち。

最近魚の養殖に村の自治費を費やすも、目立った成果が一向に上がらず、世論に押されて村長が辞任を迫られている。

その所為のなのかは定かではないが、現村長は、数年前に根治したはずの持病の胃痛が最近になって再び発症したり、さらに漁獲量と比例するように髪の毛も見て判るほどの減少傾向にあったりで、悩みの種が尽きないどころか、次々と芽吹いては新たな問題の種子を撒き散らしているのが現状である。

そんな村の酋長であるマイオン・アルマ・フィリップス（57）は、とあるニュースを耳にした。噂の伝達速度が火の回りよりも速い、婦人会役員の中年女性から寄せられた情報である。

以前までの彼ならば、口で調子は合わせても、そんな根拠のない噂はまともに飲み込まないのであるが、しかし今は現状が現状である。革新派の後押しで今の地位に就いた彼は、村の未来を案じて先行産業に手を出した。それに失敗しても、そして辞任を求められても、あくまで村の事を第一に考えて現在も村長の座で踏ん張っている彼からすれば、その噂は、溺れている時に見つけた藁のような存在だったのだ。

その噂を要約すると、次のようなものになる。

『大陸連合からお忍びの視察官がハグにやってきている』

光明が いや、そうではない。早とちりはいつでも冷静な判断をもたらさない。

大体、大陸連合の人間が一人やってきたところで、村の現状がどう良い方向に転ぶというのだろうか。

船が来ない。人も来ない。魚さえいなくなるうとしている。きっと、いつかは村人たちが去っていき、この村の歴史さえ人知れず時代の波に浚われていってしまう。

そんな未来が容易に想像できてしまうのだ。

そんなことは、あつてならない。

私は村長だ。しつかりしろ。

彼は椅子に背にもたれ、天井を仰いだ。

／＊／

一方その頃。

ミハルは連行されていた。

陸：丘に上がって苛まれる

今こそ、語ろう。

／＊／

曖昧な真実と確かな虚構。それらが歪に交錯し、裏腹に錯誤する。たった一瞬の接触を見誤った今、僕は背の向こうの世界に暗澹としていた。

幼い頃から続く恐怖がある。

視界の陰　あらゆる死角が僕の恐怖で。

『世界は在るがままに美しい』

そう呟いた僕に微笑んでくれた貴女。

貴女の影が歪んでいる様に視えるのは、僕の可視域がずれている所為ですか？

／＊／

「思わせぶりなモノローグ語っても駄目っち玉砕。」

「むう。じゃあ、パラグラフを二つも用いらせたことに対しての贖罪を僕にしてください」

「え、えっと……こ、こんな感じかねえ？」

そう言つて、彼女はビジュアル的にミハルを扇情した。描写は割愛させていただく。

「ちちち、ち、つがあああっう！ アンタ良いメガネしてんだから、それ強調しないでどうするよ!？」

根底から位相している社会通念　そもそもが裏側であるものを、それこそが表であると信じているような　を振りかざしながら（彼は、この事実がお互い様であることに気付いていない、という叙述トリックを含有する）、ミハルは彼女に激昂した。

「うっう。こ、こっう?」

大人しく彼の言葉に従う眼鏡の女性。彼女は前傾バストアップの俯瞰カットを演出した。

ショートボブヘアの中性的な輪郭、現象された理性を形而下に象徴する四角いノーフレームの眼鏡、そして、大陸の権威たる警察組織に身分を属させていることを外界に証明する、青いタイトスカートの制服。勿論、言うに事欠かず、キャップ付き。

彼女こそ、まさしく理知系属性の記号の化身である。組織の犬である。

諸君、人間の想像力とはかくも偉大なものだ。それを信じて、頑張れ。最大限のイマジネーションを振り絞れ。

幻想の果てに、ミハルは立った（注：メタファーである）。

「　良きかな」

ミハルは天を仰ぎ、この世を創りたもうた神に感謝した。

この記憶は忘れない。目蓋に焼き付けておこう。そう思った。

「つて、何やらせてるかああっつ!！」

不意に、顎に衝撃が炸裂した。抉るような、死角からのアッパーである。

本日二発目の暴力に、想い出は、一瞬で消し飛んだ。

「あ、あごが……」

舌を嚙まなかったのは不幸中の幸いだろう。ミハルは悶絶寸前で呻く。

「あんた、国家権力を馬鹿にすんじゃねえぞ」

「け、権力は間違っても暴力になりえねえ……」

「今のは聖なる少女領域を侵犯した報いやね」

「偽証罪が適用されそうな発言だなくええっつ」

腹に鉛のように重いブローが入る。そして、拳をぐりぐりとねじ込みながら、彼女は言う。

「よそ者のペド野郎に発言権はない。黙秘権もない。供述は法廷であんたに不利な証拠として用いられる。あんたは弁護士との立会いを求める権利はない」

「あ、あんたは神かなにかなのか……」

どうやら彼女の前では、人の権利は畜生以下に扱われてしまっらしい。

口は開くな、知ってることは全部吐け。どちらにしろ有罪は確定だ。

彼女の宣告は、つまりはそういうことであった。

「一体、俺が何をしたって言うんだよう」

手錠を後ろ手で掛けられた状態のまま、涙を流すミハルは質素な椅子に腰を落とした。

ミハルは現在、村の警察駐在所に連れ込まれていた。その手法はとても荒々しく、傍から見れば拉致事件とも言える所業でもあった。ただ、衆目のある村の広場でミハルを捕らえた（語弊あり）女性は、村でも勤勉で頼もしいと評判の警察官であるらしく、逮捕現場（語弊あり）で彼女の強制執行を止めるものは誰も居なかった。

あの下世話そうなマダムたちが闊歩する小さな村のことである。きっと今頃、あることないこと、ミハルに関する噂がここで飛び交っているに違いない。

「あああああああ」

思わず呻いてしまう。頭を抱えたいところではあるが、手錠があるので腕の自由は全く利かない。仕方なくミハルは椅子をガタガタと鳴らした。

「俺を解放しろー冤罪だー人権侵害も甚だしいぞー」

生来的に有する権利に訴えてみる。

しかし、警察官の冷たい眼差しに変化はなく、

「よそ者のペド野郎に発言権はない。黙秘権もない。供述は法廷であんたに不利な証拠として用いられる。あんたは弁護士を立てる権利はない」

その明らかに局地限定な言い回しを再び宣告されるのみであった。

## 地に踊る

さて、ミハルが何の容疑で連行されているのかというところ。

「じゃー、今からアンタを児童買春等目的人身売買等の容疑で事情聴取するから」

「ソナー」

身に覚えのない罪状を突きつけられて、頭を抱えるミハル。逃亡しないという意思表示を懸命にした結果、なんとか手錠は外して貰った。彼が権力に屈した瞬間でもあった。

「やかまし。アンタはここにいる時点で、ペペらペらと洗いざらいその卑猥な口を開く他に選択肢はないんよ。過ぎた抵抗は、アンタに付く罪名を増やすだけになるということを覚えとき」

「ハイ……」

人としての尊厳を保つことは諦め、ミハルは大人しく両手を膝の上に置いた。

「じゃ、名前は？」

調査を取るのか、警察官は幾つかの冊子を机の上に広げながら詰問を始め出す。

「ミハル・アルク、ト申シマス」

ミハルは機械的に答えた。知性を放棄するということは、こんなにも楽になれるということなんだな、と思った。なけなしの知能を振り絞って、思った。

「自身の身分を証明するものはある？ 市民証とか」

「ハイ」

腰に付けた袋から手のひら大の薄い冊子を取り出し、警察官に差し出す。彼女はそれを受け取り、慣れた手つきで幾つかの箇所を調書に書き写していく。

と。直ぐに彼女の手の動きが止まった。

「……アンタ、この大陸の人間じゃないじゃない。入管許可書は？」

「ハイ。アリマスヨ」

先ほどと同じ動作を繰り返して、ミハルは入国管理局許可書を彼女に提示した。

それを奪い取ると、彼女は書面をまじまじと見る。次いで、彼女の眉間にしわが寄る。しばらくしてから、ミハルの顔をちらちらと窺い出した。

「あ、あのミハル・アルクさん」

唐突に名称でミハルを呼び始める警察官。

「ここに『天司庁』とゆうー印があんだけども」

そう言いながら、彼女が指差して示したのは、入国申請元の印章欄であった。

「アンタ、職業は？」

訊ねられて、両者の挙動が一斉に止まる。

警察官の方は、よそ者且つ不審者である人間の一切を推し量らんと感じる。という感じで。

ミハルの方は、全くの思考が停止した様子で。

(こ、ここはどうしたら良いのだろうか)

ミハルは、混乱しかかる思考を落ち着かせ、整列させる。

正直に話すべきなのだろうか。それとも、曖昧にぼやかして答えるべきなのだろうか。

ううむ……公務で嘘を吐くのは問題だし、しかし全て真つ正直に話してしまうのも後で色々ややこしいことになるかもしれない……。

どうしようどうしようどうしよう。

「実は、ワタクシ天司庁から『村興し大使』という名目でこの度南国の村ハグにやって参りました次第でありましてですねハイ」

ペペらペらと出任せの虚偽を申告するこの口が憎い。

しかも、警官相手に、である。二枚舌がここまで酷くなると、これらの人々に嘘を吐いては嫌われるのが趣味な狼少年であると判断されても仕方ないのではないだろうか。

「……………」  
彼女の訝しげな表情に変わりはない。  
と。

「……キヤスパー、仕事ー」

駐在所の奥　警察官が座っている向こうに更に部屋があるよう  
だ　に向かつて声を掛ける彼女。

その向こうから、はい、という返事が聞こえて、時間を置かずに  
声の主が表れる。

出てきたのは若い男性の警察官であった。長身ではあるが、全体的に優男風であったので、警察の制服姿でもどことなく頼りない。

「何かありましたか？」

「はい、これ」

彼女は、先ほどまで記入していた調書を背中越しに男性へと投げ渡した。

女性警察官の方が先輩なのだろうか。扱いがどうにもぞんざいだ。調書を受け取った男性は、事無し気な様子でそれに目を通す。

「ふむ。これは、彼のものですか？」

と言ってこちらを見る男性警察官。

目が合ったので会釈をしておく。

「そーよ。村をうるついでた犯罪者なんだけどね。この人、アンゲルの天使庁役人らしいんだけど。照会してみて」

アンゲルとは大陸名であり、そこにはミハルの所属する天使庁が本部を構えている。

天使庁だけではなくあらゆる機関の本部が置かれているアンゲルは、世界の中枢的な機能を果たす大陸である。なので、『第一大陸』という名称があったりもする。ちなみに、現在ミハルがやって来ているこの大陸は、通称第三大陸　デイマラクムという名を持つ。

……スルーしたけど、何もしていないのに犯罪者扱いか、俺。

ミハルは心の中で涙を流した。

「了解です」

そんなミハルは置き去りに、照会作業とやらを開始する様子の男性警察官。

彼は一息吐くと、眼を瞑りだした。

(あら?)

ミハルは既視感を覚える。

照会作業。自前の能力。

そして、それらのキーワードが直ぐさまに記憶へと結びついた。

「あ、プットなのか」

思わず口に出す。

女性警察官は、驚いた様子でこちらを見た。

「……よく判るわね、この風貌で」

『この風貌』というのは、彼女の後ろで立ったまま目を瞑っている男性を指しているのだろうが、確かに彼は一見だけでプットに見られることはないだろう。どこからどう見ても人間の若者である。

ただ、外の媒体を用いず何らかの情報を引き出すことが出来る存在は、例外を除いて、情報作動体 『電腦』を持つプットしか在り得ない。

「ぼくにもプットが就いているので、もしかしたらそうかな、と」

「ふーん。天使庁はお金持ちだものねー」

頬杖をつきながら彼女は言う。その台詞に含むものがあつたことは流しておこう。これ以上の面倒は勘弁していただきたい。

……いや、と言うか、あなたにも得体の知れないプットが就いているじゃないか。

「出ましたよ」

作業を終えたのか、プットが結果報告を始める。

「確かに間違いないみたいですね」

「ちっ」

あ、舌打ちしたよこの警察官。

「……まあいいわ。じゃあ、部署は」

そう彼女が訊くと、プットは作業のために再び目を瞑った。

「あれ？」

彼が眉をひそめる。

しかし、それは一瞬のことだった。

「あ、繋がった。えーと、『世界平衡機構部』の『広報課』とありますね」

その単語にミハルは覚えがなかった。

世界平衡機構部……は良いとして……『広報課』？

自分の知らない間に異動があったりしたのだろうか。

「なに、アンタ宣教師？」

女性警察官が半目でこちらに訊いてくる。

「いや、宣教師ではないです……が、天使庁の人間であることは間違いないですハイ」

言葉を濁す。濁せるだけ濁す。

「まあ、いいわ」

そう言うと、彼女は椅子の背もたれに体を預けた。ギギッ、と椅子が鳴く。

「ふーむ。どうやら身分ははっきりしてるんね」

プットの照会結果に当たってしまったってのは、彼女も納得せざるを得ないのだろう。不満が残っている様子ではあるが。

ミハルは一先ず胸を撫で下ろした。

「だけれども、道端で『裸の少女』なんてぶつぶつと呟いている時点でアンタは不審者に違いない」

彼女から再度宣告される。

おっしゃる通りではございますが。

（俺、そんなこと口走ってたのか）  
自分でも呆れかえる。

思考野から言語野への脳内シャトル便はどうにかならぬものか。取り合えず、自分の身元は証明できたのだから。

次は身の潔白を明らかにしなければならぬ。

ミハルは、言葉を選びつつ　しかし、事実が明瞭に伝わるよう、

口を開いた。

「いや、実はうちの連れが裸で宿の外から飛び出してしまいました」  
沈黙。

二人の警察官の冷たい視線がミハルに突き刺さる。

「は？」

「いや、だから」

同じ台詞を再び言おうとした、そのとき。

「ここにいたのか、ミハル。腹へったぞ」

突然駐在所内に入り込む、慄然とした少女の声。

二人の警察官は、ミハルの後ろに現れた少女に視線を移してから、  
なんとも言えない表情となった。

ミハルは彼女らの様子と、その聞き覚えのある声色から、大体の  
ことを察した。

振り返って、目をやる。

いつの間にか駐在所の入り口に立っていたのは、白髪黒肌赤目の  
少女。

少女の名はエリス・ティルナログで その姿はやはり未だに裸  
のままであった。

タイミングが良いのか、悪いのか。いや、きっと良いのだろう。

そう前向きに考えなければやってられない。

「えーと、エリス。今までどこに居た？」

訊くと、エリスはぼりぼりと白髪頭を掻いて、

「ん？ エリスがいたのは海だ。あそこには、なにもないな。つき  
は森に行こうと思って、ミハルを探してた」

そう答えながら、駐在所の中に入ってきた。

ミハルは、二人の警官からの視線を遮るようにして、彼女の前に  
立つ。

「おーけー分かった。じゃあ、とりあえず」

「何だかとても嫌そうな顔をしている女性警察官に向かって言った。  
何か着せるものありません？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7255c/>

---

翼持ちと翼持ちと翼持ちと蟲飼い

2010年10月15日09時37分発行